



シクラメン栽培は、各々目的の別れた3つのステージに分けられます。発根、成長、そして開花です。開花ステージでの成功は、前の2つのステージでの成功によって決まります。発根の目的とは、苗の根が鉢の中できちんと張れるように最高の状態に持っていくためです。発根の段階は、苗にとって厳しく、重い負荷がかかることもあります。この大切なステージにおいての成功は環境、栽培、栽培に使用する道具や設備などに影響を受けます。

I - 苗

A - 苗の品質とケア

鉢上げの準備ができた良い苗とは、新しい培養土で再成長できるよう健康な根が十分に張っているもののことです。最良の結果を得るには、苗販売元でも購入できる、突起のついた板でプラグ苗を押し出してください。

《そのまま移植できる》プラグ苗



移植された苗



育苗トレイは、数日間なら10~12℃を保った温度調節機能のついた部屋に入れておくこともできます。しかし、それより温度が下がってしまったり、部屋に長く置きすぎると、再成長や発根が遅れるリスクが高まります。鉢上げ前に長期間脱水状態が続いた苗は、適切にケアされた苗に比べて同じようなクオリティーの根を張れません。

B - プラグ苗のサイズ／鉢のサイズ

鉢上げにおいてまず一番大切なルールは、プラグ苗のサイズに対して適切な鉢のサイズを選ぶことで、移植後最初のかん水の際に酸素不足が起こらないようにすることです。下記の表は、ご参考までに移植先の鉢の直径に対し、合ったプラグ苗の直径と体積を示しているものです。

鉢サイズ 直径の	プラグ苗 の直径の	発芽後の苗の 平均週	プラグ苗 の体積 cc = cm ³	発根までの目安* の期間	トレイ 50x30cm (セル数)
6-9	16/17	10 週目	4-5	4 週	400-500
10.5	18/22	10/12 週目	6-8	4 週	200-300
12	22/28	12/14 週目	10-20	5 週	100-200
14	30/40	14/16 週目	25-40	5-7 週	60-100
17	30/40	14/16 週目	25-40	7-8 週	60-100

*かん水方法や培養土の配合によって発根にかかる期間が変化することもあります。

直径19 cm 以上の鉢については、もう一段階踏まえてください。					
鉢サイズ 直径の	プラグ苗 の直径の	発芽後の苗の 平均週	プラグ苗 の体積 cc = cm ³	発根までの目安* の期間	トレイ 50x30cm (セル数)
(直径 9-11cmの鉢 へ) = 1回目 の移植	18/22	10/12 週目	6-8	4 週	200-300
直径19 cm 以上の鉢	9/11 cm	14/16 週目	250/500	8/9 週	

プラグ苗の中には、同じ直径でも深く、体積が多いものがあります。このようなプラグ苗は、緩衝として優れた効果を発揮し、再成長を保証するために必要な根の数も増やすので、シクラメンの鉢上げには推奨します。

プラグの全体が新しい培養土に接触していて、なおかつ球根部分が埋もれてしまわないようにご注意ください。かん水での強い水圧によって苗が培養土より飛び出してしまうたり、埋もれてしまったりすることが多々あります。



II - 気候環境の調節

A - 発根段階における場所の準備

健康な根を張らせるために、発根段階における場所の消毒は必要不可欠です。

気温の高い国や夏季 (ADT***が25°Cを超える場合) は、発根段階では培養土の温度と湿度を保つために地面に鉢を置くことを推奨します。しかし、地面が平らでない場合などで地面に水が溜まっていると、蒸発した際の気化熱で気温が落ちてしまうので、それを避けるために地面と鉢の間には少し空間が必要です。そのために、脚付きの鉢や、鉢を移動させる際に使用するプラットフォーム付きのトレイなどをご使用ください。

ADT***=一日における平均気温

プラットフォーム付きの栽培トレイ



発根完了



この段階では、鉢を置く地面の違いがもたらす効果を考慮しなければいけません。例えば、コンクリートの地面では夏に急激に湿度が下がることがよくあり、培養土の緩衝効果が失われ、発根を遅らせる要因となりかねません。

網状のベンチの使用で頻繁に見られるのは、風通しが良すぎて、健康な発根の邪魔をしている現象です。過多となった多量の空気の流れを遮断するために、移動用のトレイを下に敷いたり、その他の保護ツールをご使用ください。

農場での発根段階の重要性を考慮し、それぞれの栽培要因の調節を可能にするために、常に栽培する場所とは別に発根段階のためだけに区切られた場所を用意することが必要です。

B - ADT (一日における平均気温)/最大光度

発根において、最も適した気温は一日における平均気温 (ADT) で18-20°Cあたりで、光の強さにして最高400 W/m²の照射です。

下記のような場合は発根段階が長引く可能性があります：

- 気温18°C以下の場合、品種によっては、そして鉢サイズが大きなものなどは、発根段階の期間が長引き過ぎてしまい、開花時には株が小さすぎてしまう場合もあります。
- 非常に暑すぎる栽培環境 (ADTが25°Cを超える) や最高光度が300 W/m²を超える環境では、発根段階の期間が長引く可能性もありますが、根の張りは良くなります。

***ADT Average Daily Temperature – 一日における平均気温

ADT* (一日における平均気温)**	<15-18 °C	18 -20°C	20-25°C	>25°C
最高光度	500 W/m ²	400 W/m ²	350 W/m ²	<300 W/m ²

*夏季には、気候によっては、夜間温度の上下が激しくなることもあり、温室内の一日における平均気温に著しく影響を与えます。

ADTによってシェーディングを調節するために、特に夏季には、温室の外を白く塗ってシェーディングし、中もスクリーンをご使用いただくことを強くお勧めします。

最低限、換気設備を設け、かん水によって発生した余分な湿度を取り除いてください。



III - かん水の調節

A - かん水システムの効果性

発根段階では、効果的な上部かん水システムには次の2点の基本的な性質が含まれていなくてはなりません。均一性と、異なる鉢サイズによって水量を調節できる性質です。

ウォーターカーテンのような散水ノズルは、これらの性質が全て含まれているシステムです。カーテンのように上部より非常に均一に散水され、鉢内により浸透しやすく、水量を調節し、均一性を保つよう、速度や角度の調節もできます。

ウォーターカーテン散水ノズル



スプリンクラーシステムは、円を描きながら、重力によって散水します。このシステムには、デメリットが2点あります。散水される部分が重なってしまったり、不規則になってしまいます。また、傘のように水を受けてしまうシクラメンの葉の形状が、培養土への水の浸透を制限してしまいます。

もし、ウォーターカーテン等の散水設備がない場合は、スプリンクラーを使用するよりも、柔らかな、きめの細かい散水ができる手かん水用スプレーヘッドのご使用をお勧めします。

B - かん水の基準

かん水がどのような場合でも、温室内のADTに適したシェーディングが必要不可欠です。シェーディングの目的は、安定した栽培環境と培養土の湿度を保つためです。鉢内が極度の乾燥状態になってしまうと、次回かん水する際に大量の水を底にまで行き渡らせざるを得なくなってしまうので、そのような状況を避けることが大切です。苗の弱点は葉ではなく、根であることをお忘れなく。

発根段階においてのかん水過多



鉢上げが終わると、まず最初のかん水では培養土の湿度を均一にするために多めにかん水しましょう。それ以降は、軽めに、しかし頻繁にかん水しましょう。実質的には、鉢全体にかん水するのではなく、湿気が拡散により底まで浸透していく状態です。鉢の底が乾燥しすぎないようにご注意ください。

理想的な発根



暑い時期に葉熱を取ろうと、頻繁に、軽く、早く、葉をさっと濡らすだけのような手かん水を行うことは、到底お勧めできません。シクラメンの株を柔らかくしてしまい、発根を遅らせてしまいます。その上、炭素病やエルウィニアのような様々な病気にかかるリスクを高めてしまいます。



IV - 施肥

A - 元肥

ほとんどの品種や栽培環境では、発根段階を乗り切るには1Kg/m³の元肥で十分です。もし、培養土の隅々まで根が張っていないければ、発根を促すために施肥は止めましょう。肥料に含まれる鉱物塩類が蓄積し、特に暑い地域では成長を止めてしまうこともあります。そのため、たとえ水のpHを調節する必要があったとしても、かん水は肥料も酸も足していない真水で行ってください。

発根段階に肥料過多になってしまった株



B - 緩効性肥料

一般的な緩効性肥料はお勧めできません。これらの肥料はより早く溶けてしまうので、発根前に溶けてしまい、溶ける量も多くなってしまいます。この効果は、暑い地域だとより顕著に現れます。しかし、涼しい気候の地域では、特に遅く溶ける緩効性肥料を非常に少量なら、注意しながら試してみることもできます。

ご注意ください。ほとんどのこれらの肥料の配合はシクラメン栽培にとってはアンモニウム窒素態(NH₄)含有量が多すぎることです。

V - 植物成長調整剤

苗が再成長している間、成長調整剤を散布すると、成長が止まり、その結果発根も止まってしまいます。もし成長調整剤の散布が必要でしたら、スプレー散布するのに最も適している時期は発根の最終段階のスペーシングの直前がよろしいかと思えます。

成長調整剤で成長が止まった株

